

給ぬとての、しりあへるいとあさましどもいふばかりなし。○中いまだ御つぎもおはしませず、又御はらからの宮などもわたらせ給はねば、世の中いかになりゆかんずるにかとたどりあへるさまなり、さてしもやはにて、あづまへぞつげやりける、將軍○藤原は大殿家、道御子、今は大納言殿と聞ゆ、御うしろみは承久にのぼりたりし泰時朝臣なり、時房と一所にて小弓いさせさかもりなぞして、心どけたるほどなりけるに、京よりはしり馬といへば、何事ならむと驚きながら使めしよせて、きくにいとあさまし、さりとてあるべきならねば、そのむしろよりやがて神事はじめて、若宮の社にてくじをぞとりける、そのほど都にはいとうかびたる事ども、心のひきびきいひしろふ。○中あづまの使みやこに入るよし聞えける日は、兩女院○後鳥羽后、修明○承明より白河に人を立て、いづかたへまゐると見せられけるぞことわりにげにいま見ゆべき事なれども、のゝ心もとなきはさおぼゆるわざどかしと例の口すげみてほゝゑむ、日ぐらしまたれて城介義景といふもの三條河原にうちいで、承明門院のおはしまする院はいづくぞと、かの院より立られたる青侍のいとあやしげなるにしもとひければ、さくこゝちうつゝともおぼえず、まかゝと申まゝに土御門殿へまゐりたれど、門はむぐらつよくかため、どびらもさびつきはしらねくちてあかざりけるを、郎等どもにとかくせさせて、内にまゐりて見まはせば、青き苔のみむして、松風よりほかはこたふるものもなく、人の通へる跡もなし。○中定通のおとゞばかりぞ、何となくおのづからの事もやと思ひて、なへばめる烏帽子直衣にてさぶらひ給ひけるが、中門にいで、對面し給ふ、義景はきり戸の脇にかしこまりてぞ侍りける、阿波院○土の御子○後、嵯峨御位にと申ていでぬ、院の中の人々上下夢のこゝちして、物にぞあたりまどひける、仁治三年正月十九日の事なり、世の人のこゝちみなおどろきあわて、おし返し、こなたに参りつとふ馬車のひゞきさわぐ世のおとなひを、四辻殿○修明にはあさましう中々ものおぼしまさるべし、又の